



木は何にでもなる。何を作ろうか
考えるのが楽しくてたまらない。

味のある風貌もそうだが生き方そのものが縄文人のようだと朝倉康登さんを評する人もいる。もちろん誉め言葉だ。俗世間とは無縁の純粹な野人である。畑で野菜を作り、山でイノシシを獲り、海や湖で魚を釣り、それらが食卓に並ぶ。そして、野山に出ない時間のほとんどは木工工房で木を削る、木を眺める、木と語る。まるで木そのものに同化してしまうのではないかと思えるほど。

1人の女性と出会い、結ばれたのは20代初め。新妻の両親は栃木県益子町の著名な陶芸作家だった。陶芸夫婦は木をめぐって愛するムコ殿に「木のスプーンを作ってみたら」と軽い調子で勧めた。軽い調子だったが、モノづくり師の2人はムコ殿の才能を見抜いていたのだろう。思ったとおりすぐに熱中した。これが売れた。さあ、それからはまっしぐらの自己研鑽が始まる。独学で、ありとあらゆる家具や日用品を作った。「木は何にでもなる。何を作るか考えるのが楽しくてたまりませんでした」。ぐんぐん実績を積んでいく。野外のクラフトフェアなどに出版すると、高い評価を受ける。

「彼の作品には技巧だけではなく、心が漂っている」とは、ファンの1人の評だ。木工作品の聖地ともいわれる東京銀座のデパート松屋で展示即売もやり、手応えは十分あった。いまいちばん作りたいものは？

「そうですね、自分にしかできない皿かな。まあ、年齢とともに作りたいものがいろいろ変わってくるんですが」。

木作家
朝倉康登

ゆ
う
ゆ
う、

は
り
ま

